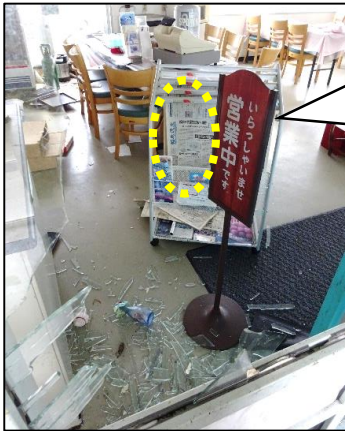


あの日から4年

～止まった時計、流れる時間～



みなさんが毎日友だちと話をしたり、遊んだり、勉強したりする教室ですが、上の3枚は福島県南相馬市にある学校の教室と体育館の写真です。全ての教室の時計は地震が起こった時間で止まっていた。黒板は「頑張ろう！」など応援メッセージで埋め尽くされていました。東日本大震災の日、多くの学校で卒業式でした。この学校の体育館の舞台にも卒業証書授与式の看板が見えますが、床が陥没して体育館に入ることはできませんでした。



←これは南相馬市の海沿いにあるホテルのレストラン、↑はそこにあった新聞です。ついさっきまでお客さんがいたかのように新聞や食器や家具がありますが、最後に人がいたのは2011年3月10日、東日本大震災当日です。その日から誰も立ち入ることはできず、割れたガラスや当時の新聞だけが残っています。廊下に散らばる野生動物のフンが、4年の月日を物語っていました。

←ホテルや小学校の近くは壊れた家や手つかずの畑など、地震と津波の被害を受けた後がそのまま残っていました。



復興はいつ？どこで？誰のために？

福島県の南相馬市や浪江町には誰も住んでいません。東日本大震災後の原子力発電所の事故により、全員避難したままです。放射能の影響で、住むことはできません。家に帰ることも自由にできません。町の話によると、家は泥棒に荒らされたか、長く放置されてカビだらけか、野生動物の住処になっているか…というところが多く、故郷に戻りたいと言う人が一部と、戻りたくないという人もたくさんいます。人が住む予定であれば復興しますが、住めない場所には復興の努力の跡もなく、4年間の月日だけが流れていました。

多くの場所で地震と津波の被害がありました。被災後、復興している市もあります。右の写真は福島県いわき市の写真ですが、海岸沿いには新しい堤防が作られつつあり、防波のために木が植えられていました。家が流されて空き地はたくさんあるけれど、工事用車両がたくさんあり、これから少しずつ復興していくという希望を感じることができました。



福島県で70日間生活し、たくさんの地元の人と話をしました。いわき市の仮設商店街では、お店の方から「地震の後、〇〇っていう遠い国から偉い人が応援に駆けくれたんだ。ありがたかったよ。だから外国行ったらお礼言っといて。」と言われました。「家に帰れないのは辛い。だけど友だちや家族がいるから後ろ向いてられないし、みんな一緒だから毎日遠い仮設住宅からでも通って店開けるんだ。」という声も聴きました。家に帰れなくても、必死に前を向いて生きておられる方がたくさんいます。福島の農作物は放射能に汚染されてるのでは？と疑われるから、収穫した全ての食べ物は放射能検査を行い、安全基準をクリアしないと出荷しないほど徹底しています。福島の人々の願いの一つは、助けてほしいとか何かしてほしいとかではなく、たくさんの人に福島に来てもらい、福島の今をじっくり見て、日本人にも世界の人にも伝えてほしいということでした。私が書いたことは被災地の一部でしかありませんが、私は二本松市で訓練を受けて、福島で感じた地震の傷跡や人々の絆、優しさを忘れません。そして、被災地のことを知り、忘れずに気にかけてほしいと願っています。

訓練所がある市

訪れた被災地

